

【12】町が橋を渡って引っ越した？

最近はやりの江戸東京話しの一つを私も披露しましょう。

東京駅の東側の新幹線ホームに近い出入口「八重洲口」は、駅の施設自体は千代田区になりますが、日本橋・京橋の江戸期以来の商業地、現在の中央区に面しています。対して、東京駅西側の皇居に面している方の出入口は、「丸の内口」と呼ばれ、日本の首都東京の表玄関ということで、儀礼的ですが皇族や外国の外交官も利用されます。

近年、八重洲口側にも高層ビルが立ち並び、地下には日本一の八重洲地下街があり、駅前広場の一面は高速バスの乗り場になっているなど、その発展は目覚ましく今や乗降客数は丸の内口をしのぐ勢いです。八重洲口を出た道路の向こう側の街は、八重洲という中央区の町名となっており、八重洲口の前に八重洲の町があって何の不思議も無いようですが、歴史を遡ってみると面白い複雑な事情があります。

「八重洲」の起源を訪ねると、古く徳川家康までさかのぼります。

1600年に今の大阪府に漂着したオランダ船の乗員のヤン・ヨーステンが家康の海外事情・軍事の顧問格になり、今の丸の内あたりに屋敷を与えられて住んでいたのも、その名にちなんで内堀沿い（船が入れた）の堀端が「八重洲河岸」（やえすがし）と呼ばれていました。その由来もあってか、明治5年に新しく町名が付されたとき、この辺を「八重洲町」と名付けたのです。

関東大震災（1923年）後の昭和4年に、この八重洲町とその北側の永楽町などいくつかの町が整理統合されて新しく「丸の内」という現在に続く町名になりました。この時、従来、東京駅の出入口の無かった日本橋・京橋側にも「八重洲口」が設けられ、それへの通路として外内堀をまたいでコンクリートアーチの立派な橋が架けられ、「八重洲橋」と称しました。（前身に同名の木橋がありました。）こうして八重洲という名は町名からは消えましたが、駅の出入り口と橋に受継がれた形になりました。

さて、終戦後の昭和22年に、東京駅八重洲口のまん前の江戸時代以来の外堀は埋立てられ、文化財的存在だった八重洲橋も撤去され、駅前広場が造成され、昭和29年には大丸デパートの入った大きな駅ビルも建設されました。それに合わせるかのように、駅前面の中央区の町名が変更されて八重洲一丁目、同二丁目になったのです。こうして、明治初年、今の千代田区の丸の内側に設けられた八重洲町は52年後の昭和4年にいったん無くなったのが、さらに25年後に場所を変えて中央区に生まれたことになります。

以上、400年にわたる八重洲の歴史を振り返って、私の目に幻想が浮かびました。

それは、東京駅の“表側”にあった八重洲町がその町の名を廃止されたことを悲しみ、堀に架かっていた同名の橋を渡って対岸に逃げて、現在の地で生まれ変わって生きのびたというものです。一種の都市伝説というか都市幻覚と笑ってください